

当時、一緒に務めていた教員は、「みんなで語り合う人権学習」をどう思っていたか。受ける側ではなく、実施する側の追跡調査も同時に行いました。

Y教諭が、当時はふり返り、3つのタイムスリットに分けて記述してくれました。

「1 当時思っていたこと」

「2 進行役の立場としての私」

「3 今振り返って思うこと」

これらを3回に分けて、ご紹介したいと思います。

1 当時思っていたこと

教師の言葉ではなく、同じ目線の友達、生活と共にしている子からの語りには、比較的、心を聞いて考えられていた。その子のいつもの声で、いつもの言い方で話されると、特に素直に受け止められるという場面を多く目にした。

子どもたちは、自分の心のフロンテナに響いた言葉を、思いの外、覚えていたり考えたりする。発表はしなくとも、考えを巡らしていたことは確かだと思ふ。黙っていて発言はしなくとも、クラス他の子たち同士やリトリに、かなり心を動かされていた。

この、「心を動かされる」ということが重要なのだと思えます。もちろん、発表してくれれば面白いですが、でも、発表しないからといって、子どもたちは何も考えていないわけでは
ありません。

だからといって、教師が一方的にしゃべり続けるのも、よろしくないこと。なぜなら、
「心を動かされる」のは、「クラス他の子たち同士やリトリ」だからです。子どもたちが
知りたいたいのは、クラスや学年の仲間がどんなことに悩み、どんなことを思っているかです。
そして、つながりたいのは、その子たちなのです。

熱い思いは伝染する。ただその速度は人によって違いがある。胸に悩みを秘めている子ほど炎は
つきやすく、燃え続ける。

もちろん意見を出し合うことによって、そこに参加しているもの全員が考えを深めたり、広めたりす
ることができるが、それだけでなく、緊張の中で誰かに聞いてもらおうと言葉を選びながら発言する
中で、発表者自身も思考が深まっていた。話しているなかで、自分の考えを深めることができている。
また、思いを出すことは、周りを信頼している証にもなっていた。そしてその信頼に広えようと、周
りも発言を重ねていく。どの子も自分をさらけ出すことで、良いところも、もう一つなところ
も、全て受け入れていける人間関係が育っていた。そうやって育った人間関係があれば、他の授業も
自然と発表が多くなった。いま、推し進められている言語活動が、当時にどう可能になっていた。

人前でしゃべるといふ行為は、その人を確実に成長させてくれます。
それは、聞く側にとっても同じことが言えるでしょう。

しかもその間には信頼関係が育まれていく。

そうやって人を知り、互いを知り、関係性をつくっていく行為が、「多様な
人を受け入れる」という感性を、自然に高めてくれるのだと思います。

「熱が伝わること」…このことが、一番大切なことかもしれません。

「熱の出し方、伝わり方、それは人それぞれですが、いずれにしても、
「熱い思い」が、人に響くための根源なのかもしれません。

みんなが語り合う人権学習は、「すべてを変える」